えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第113号
令和2年
(2020)
1－2

江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集「今年、創建 100 年を迎える明治神宮」…1～2
新年祝辞　江戸博藤森館長・友の会林会長 ……3
友の会特別観覧会　「大浮世絵展」……3
えど友広小路……4～5
　会員からの投稿「銀座は我がふるさと」／えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
見学会「銀座今昔物語」……6
見学会「定番・江戸城周辺探訪－その4(外濠周辺)－」…7
セミナー「幕府・薩摩を支えた琉球の主体性」……8
えど東京一景(20)　―柴又帝釈天― ……9
江戸博クリップ「屋上庭園 !?」……9
江戸名所図会を歩く…㊼［清水坂から西台山円福寺］…10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

新春特集

今年、創建 100 年を迎える明治神宮

明治天皇とお妃の昭憲皇太后が祭られている明治神宮は、大正9年（1920）11月1日に鎮座祭が行われました。今年はその創建からちょうど 100 年。この内苑だけでも約 22 万坪（72.6 万㎡）もあり、苑内はどこを歩いても原生林と見まごうほど鬱蒼としたたたずまいを見せていますが、その昔は森などない単なる荒地でした。この神宮創建に奔走した人々は、どのようにしてこの広大な事業を立ち上げ、見事に完成させたのでしょう。

天皇崩御す

糖尿病と慢性腎炎の病気を抱えていた明治天皇が、明治45年(1912)7月ごろから体調不良に陥り、7月19日には40度超の高熱を出され、ついに昏睡状態となりました。当時の東京市長阪谷(さかたに)芳郎が後年(昭和5年・1930)に放送された談話で、その時の東京市民の状況を語っています。皇居二重橋前広場は天皇のご回復を祈る人でいっぱいであった、あるいは座し、あるいは伏す人が幾万あったことか、と。しかし、懸命な願いも空しく天皇は7月29日の夜半に危篤状態となり、同夜崩御されました。この報が伝わると、せめて御遺体をこの地で永久に守るため御陵墓を東京に設けてもらいたい、という熱烈な思いが政府や東京市に寄せられました。

明治天皇の御陵墓

明治天皇が亡くなられた7月30日、その日から有志による委員会が立ち上がり、東京市民の天皇に対する哀悼の念をできるだけ満足させるよう協議が始まりました。その中心になったのが前述の阪谷市長であり、当時72歳で子爵の澁澤栄一です。彼らは各方面に出向き、東京市民の熱意を説いて回りましたが、それは成りませんでした。宮内省が既に、天皇の在世中、京都の伏見桃山を神地として決めていたことが判明したからです。天皇家はもともと帝都たる京都にありました。それが時代の流れとはいえ、遷都によって東京に居住せざるを得なくなった天皇ですが、死後はやはり京都にお帰りになりたいだろうと推察し、納得するしかなかったのです。こうして、9月13日に大喪の礼が青山練兵場内葬場殿で執り行われ、御遺体は列

▲明治神宮拝殿

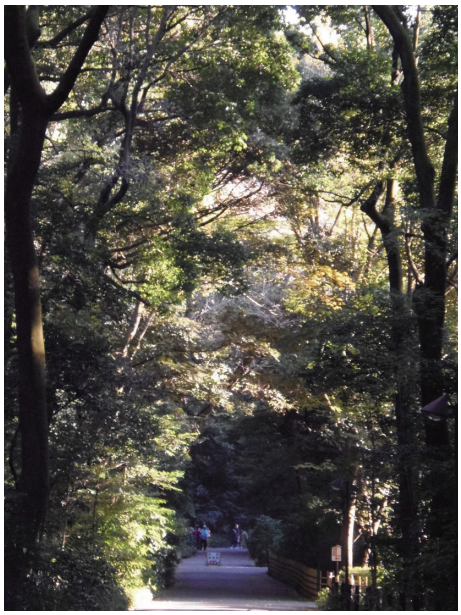
車で京都に運ばれて、9月15日に伏見桃山陵に葬られました。

神宮の場所はどこに

こうして御陵墓の場所は京都に決着することになりましたが、それならば、生前の居処、武蔵の国には神宮を造営しようという気運が生まれました。その神宮をどこに選定するか、たくさんの候補地が挙げられています。なにも、東京近辺に限らないということで、富士山、御嶽山、箱根山など８カ所が推挙されています。しかし、結果としては、やはりこの地にということで、青山練兵場跡、小石川植物園など５カ所が東京の候補地として選ばれ、その中から絞り込まれたのが青山練兵場でした。こうして、大正２年12月には造営に向かって正式に動き出すかに見えましたが、翌３年４月11日に昭憲皇太后が崩御されたのです。それにより、検討中の神宮に合祀することが決定され、お二人を合祀するのであれば、お二人にとってゆかりのある地を選ぶべきという声が上がりました。その結果、宮内省が所轄していた南豊島御料地(代々木御苑)に変更となりました。それはこの地をこよなく愛された明治天皇が隔雲亭を建て、近くの池には皇后のために花菖蒲を植えさせていたゆかりの場所だったからです。こうして、大正４年10月に着工、同８年７月に竣工しました。

こうして森は造られた

明治神宮の森は人工林である、ということを知らない人は多いようですが、この樹木は一体どこから、そして誰が、という疑問が湧いてきます。それを推進した人は澁澤栄一であり、本多静六でした。ドイツに私費留学して林学を学んだ本多に、澁澤は熱く口説きます。人工的に天然に負けない大風景をこの東京に造ってもらいたい、と。最初は渋った本多でしたが、再三にわたる澁澤の熱情についに心を動かされました。この考えの基に計画立案から造成事業の実際に至るまでを実行・管理したのは、本多の弟子でもある造園学の本郷高徳(たかのり)で、この他に林学、造園学、農学の一流の学者が集められました。どんな森にするか、どんな森が東京に適しているか、検討が始まります。当初は、昼なお暗き森に適しているのは杉や檜などの針葉樹である、と考えられましたが、熟慮の結果、将来にわたって鬱蒼とした森を持続するのは困難、なぜならば都会特有の各種工場が出す煙に針葉樹は弱いからです。このとき、強く針葉樹案を推した人は総理大臣の大隈重信で、この一帯を美しい杉林にしたかったようです。しかし、本多たちは主張を貫き通し、東京の気候風土に適し、煙害にも強い楠、樫、椎などの常緑広葉樹が広がる森を目標としました。もし現在、こうした圧力がかかったら、どう対応しただろうかと不安を抱きますが、それはさておき、しっかりした基本方針のもと、約100年で天然の森を造成する４段階に区切られた計画が作成されます。この計画は当初は多種多様の樹木から始めて、次第に広葉樹を広めてゆき、100年後には針葉樹が消滅、常緑広葉樹が完全に森を支配する、という計画でした。また、特別な手入れや肥料を施さず、自然の力で森を形成させるにはどうしたらよいか、ということも考慮されました。造成が始まると、全国各地から10万本を超える献木が寄せられ、各地方の青年団など多くの人たちが土木作業に従事するため馳せ参じてきました。



▲鬱蒼とした内苑

はじめの百年。これからの千年。

明治神宮は初詣参拝者数が日本一で300万人超、もしかしたら令和初の初詣は明治神宮で、ということで参拝者数はもっと増えるかもしれません。神宮では「はじめの百年。これからの千年。」というキャッチフレーズで、昨年から鎮座百年祭記念事業を始めています。すでに改修工事を終えた本殿では、昨年８月に前年から仮殿に移されていた御神体を戻す「本殿遷座祭」が執り行われました。また、隈研吾氏設計の「明治神宮ミュージアム」がオープンしており、その近くには「明治神宮文化館」が「フォレストテラス明治神宮」として新たに生まれ変わり、ブライダルサロン、カフェテリア、レストラン、土産物店などが並んでいます。これらを眺めながら、明治神宮も横文字を使用する時代になったのだ、時代はこうして変わっていくのだ、ということを実感してしまいました。

▲明治神宮ミュージアム

結びに、明治天皇、昭憲皇太后お二人の和歌を掲げます。

明治天皇御製(ぎょせい)

ちはやふる神のひらきし道をまた
ひらくは人のちからなりけり

昭憲皇太后御歌(みうた)

朝ごとにむかふかがみのくもりなく
あらまほしきは心なりけり

参考資料：『明治神宮』今泉宜子　新潮選書、『東京百年史　第４巻』東京都、『国史大辞典　第13巻』吉川弘文館、『日本近現代人名辞典』吉川弘文館

【取材】文・写真：広報部会・福島信一

新 年 祝 辞

江戸東京博物館　館長　**藤森照信**

あけましておめでとうございます。

今年は東京オリンピックの年であり、わが館でもそれに合わせてさまざまな展示企画を行います。

まずは正月に「大浮世絵展」を開き、歌麿、写楽、北斎、広重、そして近年大人気の国芳からなる五大絵師の競演をとり行います。国際浮世絵学会とわが館の力を尽くしての企画であり、五大絵師の名品がわが国はむろん世界の美術館から集結し、とりわけ、写楽については今後もうありえないほど、と評されています。

浮世絵の華やかさと豪華さはオリンピックの年を迎えるにふさわしい、と自負しております。

本年もよろしくお願い申し上げます。

新年ごあいさつ

江戸東京博物館友の会　会長　**林　正信**

明けましておめでとうございます。

友の会の皆様、昨年は友の会活動に、ご支援・ご協力いただきまして、誠にありがとうございます。昨年を振り返ってみますと、改元や台風などによる甚大な自然災害があり、激動の年でもありました。本年は７月より「東京オリンピック・パラリンピック」が開催されます。時間を置き、その後に「江戸博の休館」という大きな課題が控えております。

三部会は、会員の皆様方と共に「心を一つ」にして、友の会事業を推進してまいる所存でございます。

何卒、本年もよろしくお願い申し上げます。

江戸東京博物館友の会特別観覧会（令和元年11月22日）

特別展「大浮世絵展―歌麿、写楽、北斎、広重、国芳　夢の競演」

11月22日(金)午後５時から、今年度３回目となる特別観覧会が開催されました。最初に１階会議室で担当の小山周子学芸員からの「見どころ解説」があり、その後参加者のみの自由観覧が午後７時まで行われました。2012年に江戸博で開催された「大浮世絵展」は浮世絵の歴史をたどるものでしたが、今回は人気絵師５人の代表作をじっくりと見せる展覧会です。国内外から状態の良い名品が数多く出品されています。

第１章は喜多川歌麿の美人画で、展示室の最初にあるのが大首絵の始まりである「婦人相学十躰　浮気之相」です。湯上がりの浴衣姿の女性を描いたもので、姿勢により心情が表現されています。寛政三美人の一人「難波屋おきた」のように市井の美人を描いた絵や、「青楼十二時」のように吉原の遊女を描いた絵などがずらりと並んでいますが、見比べると顔のわずかな線で個性を描き分けていることが分かります。

第２章は東洲斎写楽の役者絵で、特に初期の大首絵はほとんどそろっています。「三代目大谷鬼次の江戸兵衛」は一番人気のある作品で、手の動きと表情で悪人を演じる姿は実に迫力があります。また「市川鰕蔵の竹村定之進」は江戸博の目玉マークの元になっている作品で、きりっとした口元の表情が必死の覚悟を表しています。

第３章は葛飾北斎の風景画と花鳥画です。「冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏」は世界で最も有名な作品といわれています。大波に翻弄される人々の姿が描かれており、主役は波です。北斎は水の表現に関心があり、同時期の『諸国瀧廻り』シリーズでは水の描写を徹底的に追求しています。また、花鳥画では「紫陽花に燕」のように一瞬の時間を切り取った作品が特徴的です。

第４章は歌川広重の風景画シリーズと花鳥画です。『東海道五拾三次』の中でも傑作といえるのが「蒲原夜之雪」ですが、今回のミネアポリス美術館のものは極めて珍しい初摺りで、画面上部が横一文字ぼかしになっています。広重は雨や雪への関心が高く、「近江八景之内　唐崎夜雨」では雨の微妙な表現と空気感が優れています。また有名な「名所江戸百景　大はしあたけの夕立」では、不安定な構図で雨に降られた人々の心を表現しています。

第５章は歌川国芳の武者絵と戯画で、ダイナミックな構図と独創的な色使いで当時大人気となりました。「宮本武蔵の鯨退治」では、３枚続きの大画面に鯨の巨体が迫力満点で描かれています。展示の最後にある「其まゝ地口猫飼好五十三疋」は東海道五十三次の宿場名を猫の姿で語呂合わせしたものですが、猫好きだった国芳らしく、猫の表情が見事に描き分けられています。

どの絵師の作品も見応えがあり、「誰もが知っており、そして誰もが見たい」というキャッチフレーズに偽りなしの展覧会でした。

参加者101人。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

会員からの投稿

銀座は我がふるさと

井上　孝

９月25日に行われた見学会「銀座今昔物語」に参加。懐かしい銀座を歩き、少年時代を思い出した。

昭和14年、泰明小学校入学。校舎の裏には外堀が水をたたえ、対岸には赤レンガをアーチ型に積み上げた高架線が連なり、音楽室の窓からは展望車のついた特急「つばめ」や「かもめ」が通るのが見えて旅情を誘われた。校舎は昭和４年に建てられた震災復興校舎。３階の窓の上部はアーチ型で、壁面は蔦に覆われていた。そして窓際にはスチームがあって、寒い時期には弁当を乗せて温めていたのも思い出の一つである。

マツダランプ(東芝ビル)の屋上ではサーチライトが回り夜空を照らしていたし、銀座通りの夜もヤナギの並木の下に夜店が並び、多くの人で賑わっていた。翌年(昭和15年)は日独伊三国同盟が締結された年である。交詢社ビルには大きなマーケットがあって天井には日独伊の国旗がたくさん飾られていた。交詢社は改築されたが正面玄関が残っていたのは嬉しかった。

我が家は外堀通りに面していて、家の前を市電が通っていた。青電車に続いて赤電車が通ると子どもの寝る時間だった。シンガポール陥落など、何かあると花電車が通った。屋根のない貨物電車に人形などを飾りつけ、煌々とライトを輝かせて通るのである。また、銀座は東京の中心。品川、五反田、渋谷、新宿、大塚、飛鳥山、神明町、浅草、南千住など各地から電車が来ていた。

昭和16年12月、太平洋戦争が始まった頃から千人針を縫う女性の姿が目立つようになり、夜の銀座通りも次第に暗くなっていった。奥野ビルのエレベーターとヨネイビルの地下室の窓は古き時代を思い出すのに十分だった。地下室でも自然の明かりを求めていたのである。御幸通りより北は大きな戦災を受けたにもかかわらず、よく残ったものである。

銀座４丁目の老舗は昔も今も変わらない。和光、木村屋、山野楽器、御木本、三越など。伊東屋では戦時中の物のない時代、１冊のノートを買うために早起きして並び、10時の開店を待ったのも今は思い出である。

三原橋は三十間堀に架けられた橋で、水面には赤い提灯をつけた牡蠣船が浮かんでいたが、戦後はどこからか戦災地の焼け土を持ってきて埋めてしまった。

石川啄木の歌碑を見たとき、空襲下の銀座を思い出した。毎晩のように来るＢ29、どんな寒い日でもそのたびに起き、防空頭巾を被って暗い夜の町を朝日ビルの地下室へ急いだ。一晩に２回も３回も起こされ、発生した火災を遠くに見ながら走ることもあった。

空襲といえば、昭和20年１月27日の銀座空襲は忘れることができない。病弱のため集団疎開に行けなかった私は午前中学校に行っていたが、土曜日だったので早帰りした。その後、昼過ぎに職員室に爆弾が落ちて何人かの先生が犠牲になった。泰明小学校は５月25日の空襲でも全焼している。

えど友サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

10月８日(火)月番の中島達男さんの解説で、こじゃれた落語三題のDVD 柳家小三治「不動坊火焔」、入船亭扇橋「へっつい幽霊」、古今亭志ん朝「夢金」を鑑賞した。参加者15人。

11月23日(土・祝)月番松原良さん。この度当会が応援している女性講釈師宝井琴柑が真打に昇格、５代目宝井琴鶴を襲名したので、今月の例会はその披露興行の鑑賞とした。主任(とり)の琴鶴は「出世浄瑠璃」を熱演。披露口上には一龍斎春水(先輩女流講釈師・進行役)、田辺南北(講談協会会長)、宝井琴星(師匠)、宝井琴柳が参加し、豪華な披露興行となった。参加者19人。

◆藩史研究会

10月11日(金)待場浩さんが兵庫県豊岡市出石町(いずしちょう)にあった出石藩を発表した。慶長５年(1600)、関ヶ原の合戦で小出吉政は西軍だったが、弟秀家が東軍に属し功績により家康から出石６万石を安堵された。だが元禄９年(1696)、９代英及が夭折し無嗣断絶となる。その後武蔵国岩槻から、松平忠周(ただちか)が４万８千石で入るが、宝永３年(1706)に信濃上田藩に移封となる。入れ替わりに、上田藩より仙石政明(まさあきら)が但馬国出石に入り、仙石氏の支配が明治期まで続く。参加者13人。

11月８日(金)谷川よしひろさんが萩藩を発表した。山口県長門国と周防国に領地を持ち、250年にわたり藩庁を長門国萩城に置き一般に長州藩と呼ばれる。毛利輝元が豊臣秀吉に仕え112万石を安堵された。だが関ヶ原の戦後、家康からは減封処分で隠居、嫡男秀就に29.８万余石が与えられた。その後高直しを願い出、36.9万余石の表高を公認された。参加者14人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

10月10日(木)米屋久右衛門の「日記」明治10年８月１日～９月11日。幕末から外国人が来るようになって、身体の露出や混浴を幕府もたびたび禁止していたが、明治になって10年にもなるのに相変わらずらしく、この年も警視本署から裸や股・脚の露れ候義相ならず、洩れなく諭すようにと、地主に通達が出ている。参加者６人。

10月24日(木)「日記」明治10年９月12日～10月28日。参加者７人。

11月12日(火)「日記」明治10年

10月29日～12月4日。この年、大久保利通の推進によって第一回内国勧業博覧会が、西南戦争の最中8月21日から11月30日まで上野で開かれた。田中家では、店は番頭から小僧まで、奥は下女・下男にいたるまで、縦覧するように主人より達しがあり、そのため休暇を与え、弁当代まで支給した。参加者7人。
11月26日(火)「日記」明治11年1月1日～2月20日。参加者7人。

◆『江戸名所図会』輪読会

10月17日(木)中村明義さんの担当。台東区北部と隣接する荒川区南千住周辺が中心。千束稲荷は千束稲荷神社(現・竜泉2丁目)として現存する。三河島の呼称は戦国時代の歌人木戸三河守源孝範の第宅があったことに由来する。飛鳥明神社は明治5年素盞嗚神社と改称し南千住6に現存。熱田明神社・駿馬塚・飛鳥明神社はいずれも現在の台東区吉野通りから南千住コツ通りに沿っている。参加者24人。
11月14日(木)担当は吉川政雄さん。隅田川と荒川放水路をはさんだ区域。誓願寺の北隣にある熊野神社は千住大橋の工事の時、祈ることによって橋が無事に完成したので、それ以来千住大橋と熊野神社の関係が深くなったという。十二天社は現北区の船形神社のことで、足立姫と一緒に入水した侍女の亡骸を納めたという。五智山総持寺は本堂横の阿伽井の水で目を洗うと眼病に効くと評判が立ち、これによって地名を西新井と称し、西新井大師と呼ばれるようになった。参加者20人。

◆日本の大道芸伝承会

10月9日(水)発声練習を行い、外部の人との交流や演目についても意見を交わした。恒例の深川江戸資料館主催イベントが9月28日(土)に大評判の内に終了した。1回目は80名以上、2回目は100名を超える盛況であった。参加者3人。
11月13日(水)がまの油の上達を目指す練習と売り声練習を行った。次回も深川江戸資料館主催イベントに手伝い出演することが決定したため、新たな物売りを探すこととした。参加者3人。

◆江戸を語る会

10月26日(土)伊東敏男さんの案内で江戸時代の商業の中心地であった日本橋界隈を「名句で歩く日本橋」というテーマで歩いた。十思公園をスタートし、長崎屋跡、石町時の鐘鐘撞堂跡、十軒店跡(雛見世の灯を引くころや春の雨一蕪村)、越後屋(三越)、芭蕉旧借家跡と句碑、日本橋、日枝神社などを散策した。参加者10人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

10月20日(日)中止。
10月24日(木)東武東上線武蔵嵐山駅に集合、まず白山神社へ。この神社の鳥居右手階段の下に平澤寺跡と太田資康(太田道灌の子)詩歌会跡の磁器製の説明板があり見学。その後、県立嵐山史跡の博物館へ向かった。この博物館は、太田道灌に深く傾倒していた万里集九が資康を陣中に訪ねたという菅谷館跡の一角にある。戦国時代の館跡をじっくり見学し、深い空堀と高い土塁で囲まれた造りを実感した。参加者17人。
11月24日(日)JR日暮里駅に集合、今回は「あらかわと太田道灌スタンプラリー」に参加。まず道灌の孫、太田資高が開基で、境内に道灌が築いた物見台跡、道灌丘之碑などがある本行寺へ行き、参拝・見学。道灌が日暮里に出城を築いたとき鎮守となり、5石の領地を賜ったという諏方神社へ。その後、日暮里駅へ戻り、駅前の回天一枝・山吹の花一枝の像を見学してから石浜神社へ。その周辺に道灌が庇護した武蔵千葉氏が拠城とした石浜城があったとも伝えられる。移動して荒川区立荒川ふるさと文化館へ行き、企画展「あらかわと太田道灌」を見学、スタンプ押印・グッズ交換をして解散。参加者17人。
11月28日(木)1回目と同じコースを巡った。参加者36人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。

館蔵古文書翻刻だより

◆A班『新古改撰誌記』

文化十三子年十月五日に提出された家出事件。高橋友三郎二十六歳は九月二十一日夕八半時頃外出し、その夜帰宅せず。翌早朝から親類を含め心当たりの所々を尋ねたが行方は一向に分かりません。普段身持も普通で、家族内での不和などもなくどうして家出したのか全く見当が付きません。取り敢えずこの事実をお届けいたします。上司からはもう少し時間をかけて行方を探すこと。外に借金がないか、或いは書置きがないか等も調べなさいと。その後、親から借金や書置き等もなく、本人の行方も引き続き判明せずという届が再び提出された。この事件の顛末は不明だが、別帳に記録はせず同様事件が発生した時の参考として袋に入れて保管することとなった。

友の会めも(開催日と人数)

令和元年10月～11月

◆役員会10月8日(火)16人。11月12日(火)15人。◆事業部会10月1日(火)20人。11月5日(火)22人。◆広報部会10月15日(火)10人。11月19日(火)9人。◆総務部会10月23日(水)13人。11月26日(火)14人。◆古文書講座 入門編：10月2日(水)午前86人・午後87人。11月6日(水)午前92人・午後86人。初級編：10月16日(水)午前77人・午後76人。11月20日(水)午前72人・午後69人。中級編：10月19日(土)午前36人・午後35人。11月16日(土)午前35人・午後30人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト 10月3日(木)A班7人。B班5人。10月17日(木)A班8人。B班5人。11月7日(木)A班8人。B班5人。11月21日(木)A班7人。B班7人。

江戸東京博物館友の会　見学会　（令和元年９月 25 日）

「銀座今昔物語」
―裏小路からメインストリートまで―

彼岸明けの前日、見学会には絶好の秋日和でしたが、日中はまだ猛暑の夏を引きずって銀座のメインストリートは日差しも強く、汗だくになりながらの街歩きでした。

JR 有楽町駅中央口前の「有楽町 ITOCiA（イトシア）」地階に集合、14 班に分かれてそれぞれ出発しました。

初めに「銀座」の歴史や町の特徴についてレクチャーを受けた後、南町奉行所跡、数寄屋橋御門跡などをチェック、いよいよ銀座に入ります。

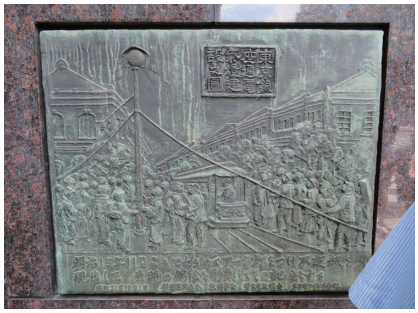
泰明小学校

泰明小学校は創立が明治１１年（1878）、銀座で唯一の小学校です。震災で焼失、昭和４年（1929）、復興小学校として鉄筋３階建て、壁が 22cm の堅牢な造りです。東京大空襲で大きく被災するも耐えて、都選定歴史的建造物になっています。ツタの絡まる校舎、フランス門と呼ばれる瀟洒なデザインの門扉などが特徴的です。超人気の名門小学校、入口に「島崎藤村　北村透谷　幼き日こゝに学ぶ」の記念碑があります。

銀座のあかり

明治７年、金杉橋・京橋間の大通りに 85 本のガス灯が初めて夜の煉瓦街を照らしました。夕暮れ時、火を入れて歩く点灯夫の姿は、当時銀座の名物でした。その後、電気の普及によりガス灯は見られなくなります。

銀座２丁目角に電気灯柱記念碑があります。ガス灯が登場してから 10 年足らずの明治 15 年、アーク灯が点灯されたことを記念する日本最初の電気灯柱の跡です。一般人が見た初めての電気の灯りで、「一にお天道様、二にお月様、三に銀座のアーク灯」と例えられ、連夜、大勢の見物客が詰めかけたといわれます。



▲アーク灯錦絵レリーフ

銀座の古いビル

震災後に建設され、戦災を免れて今に残る、銀座で一番古いビルと、二番目に古いビルを見学しました。

銀座２丁目のヨネイビルは昭和５年竣工、㈱ヨネイの本社ビルです。デザインは中世ロマネスク風、直線を強調した帯状の装飾、大小のアーチ窓が特徴的で、これも都選定歴史的建造物になっています。現在、１階は洋菓子店「アンリ・シャルパンティエ」が入っています。

▲奥野ビル

昭和７年竣工の奥野ビルは地下１階、地上７階、銀座で最も古い民間アパートですが、今はギャラリーやショップが入るアートビルになっています。銀座最古の手動式エレベーターは今も現役です。定員４人、試しに乗ってみましたが、２重の扉がかなり重く、扱いに四苦八苦しました。

銀座４丁目交差点

東京では明治 20 年までに 150 紙に上る新聞が発行されましたが、その主な新聞社が竣工したばかりの銀座煉瓦街に集まり、銀座はジャーナリズムの中心、情報文化の発信地となりました。とりわけ銀座４丁目交差点には、朝野新聞の他、曙新聞、東京横浜毎日新聞などの代表的な政論新聞が社屋を構え、互いに論陣を張っていました。

和光は昭和 22 年、服部時計店の小売部門として独立、宝石、バッグ、食料品まで最高級品がそろう専門店です。その時計塔は銀座のランドマーク。明治 27 年、創業者服部金太郎が朝野新聞社屋を買い取り、屋上に巨大な時計塔を載せた建物にしました。現在の時計塔は２代目で四方の文字盤はほぼ正確に東西南北を向いています。

銀座の路地裏

銀座には路地が 50 カ所もあるそうです。そのほとんどがビルとビルの間の細い路地で江戸時代から存在していたものも多く残っています。交詢社通りから「銀座仰天路地」と呼ばれる、まさにディープな路地を通りました。ビルの建て替えでそれが分断されようとした時、地元民の嘆願によってビルのオーナーが決断して残ったもの。ビルの１階「ル・カフェ・ドトール」の店内には通り抜けられるよう、何と２つの自動ドアが設けられていました！　そしてその奥には歌舞伎役者市村羽左衛門がたびたび訪れたという豊岩稲荷神社がありました。

▲豊岩稲荷神社

―今回は私の大好きな銀座、そのメインストリートから路地裏までを３時間 30 分、説明を受けながら存分に歩いて回りました。１頁の紙面ではとてもその魅力のすべてをご紹介できないのが残念です。参加者 103 人。

【取材】文：広報部会・岡本　脩
写真：同・内匠屋京子

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

江戸東京博物館友の会　見学会　（令和元年 10 月 27 日）

定番・江戸城周辺探訪
ーその４（外濠周辺）ー

JR 市ケ谷駅出口左手向い側交番裏の小公園に集合し、市ヶ谷門から赤坂門、さらに豊川稲荷東京別院までを見学しました。各門は寛永13年(1636)ごろに造られました。今回歩く範囲の外濠は、国指定の史跡(江戸城外堀跡)になっています。

市ヶ谷門跡から番町

集合場所の小公園は市ヶ谷見附・市ヶ谷門跡です。市ヶ谷門は、高麗門と渡櫓(わたりやぐらもん)門をもつ枡形門です。切絵図を見ると、門の内側は広小路になっていて、そこを囲むように旗本屋敷が立ち並んでいます。靖国通りを渡り、帯坂を上る途中の右手に日本棋院がありました。さらに上ると丁字路に出ます。この辺りは江戸時代、将軍を直接警護する大番組の屋敷があり、番町と呼ばれていました。大番組は一番組から六番組まであり、その名称は現在も引き継がれていて、町名は一番町から六番町まであります。

▲外濠公園からの眺め

番町は怪談「番町皿屋敷」の舞台でもあり、帯坂はそのお菊が髪を振り乱して帯を引きずって走ったとされている場所です。ただし、諸説あるようです。丁字路を右折し、三年坂を下り、外濠公園に入りました。

外濠公園から四谷門跡

外濠公園は、外濠の土手に沿って造られた公園で、外濠の様子がよく見えました。この濠は自然の谷を利用して造られたもので、幅は100m程あります。四谷の方向に進むと、左手に雙葉中学校・高等学校の校舎が見え、そこを過ぎて道路に出るとＪＲ四ツ谷駅近くです。新宿通りを左折し、少し進み左折すると心法寺に着きました。心法寺は慶長２年(1597)に開山したお寺で、境内には塩地蔵尊、銅製の梵鐘、庚申塔などがありました。新宿通りを元に戻り、四ツ谷駅手前にある四谷見附跡で小休止。

▲四谷門の石垣

四谷門は、高麗門と渡櫓門をもつ枡形門で、甲州街道から少しずらして濠の内側に設けられました。そのため、四谷見附は「喰い違い」と呼ばれていました。新宿通りの四谷見附橋のすぐ横に新四谷見附橋があります。この橋は「新」となっていますが、江戸時代に架かっていた橋の位置にあります。四谷見附橋は、ここの「喰い違い」が交通の障害になってきたため、大正２年(1913)に甲州街道から直進した場所に架けられた橋です。

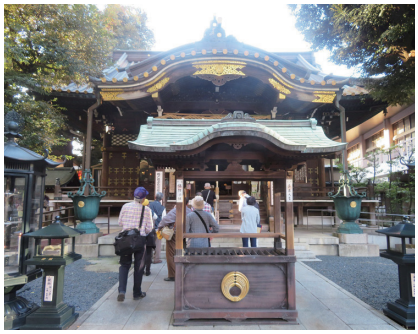
▲ 東門（旧紀州徳川家の武家門）

紀州徳川家上屋敷跡から清水谷

新四谷見附橋を左折して濠沿いに進むと迎賓館赤坂離宮が見えてきます。迎賓館赤坂離宮は、紀州徳川家上屋敷(赤坂邸)があった北側に位置します。南側は赤坂御用地です。赤坂邸は広大な屋敷であったことが想像されます。当初は中屋敷でしたが、文政６年(1823)当時の上屋敷・麹町邸が火事で焼失した後は、実質上の上屋敷となりました。迎賓館から外堀通りに進み、紀伊国坂を下りながらこの坂を舞台にした小泉八雲の怪談「むじな」の話を聞きました。途中、東門(旧紀州徳川家の風格を残す武家門)を見て、すぐの横断歩道を渡り、真田濠(四谷濠)に出ました。真田濠は、外濠で最も標高の高い場所です。真田幸村の兄で徳川方についた真田信之(信幸)の功労によって、真田濠の名前が付けられました。紀尾井坂を下って清水谷公園まで歩き、小休止。

赤坂門跡から豊川稲荷東京別院

清水谷公園から、さらに清水谷坂を進み右折してプリンス通りの右手に赤坂プリンス クラシックハウスがあります。ここは旧北白川宮邸跡で、現在の建物は昭和５年(1930)に李王家東京邸として建てられたものです。ここから下の坂は諏訪坂で、下ると赤坂門跡に出ます。赤坂門も



▲豊川稲荷東京別院

枡形門です。東京ガーデンテラス紀尾井町の横にある散策路に下り、石垣を堀側から見ることができました。石垣の高さは約15ｍあり、石に黒田家の家紋などの刻印があるのが分かりました。すぐそばにある弁慶橋は、江戸時代にはなかった橋で、明治23年(1890)に架けられ、現在の橋は昭和60年に架け替えられました。弁慶濠の名称も明治になって付けられました。橋を渡り、青山通りを上って豊川稲荷東京別院を見学し、東京メトロ赤坂見附駅前で解散しました。　　参加者113人。

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

第184回　江戸東京博物館友の会セミナー（令和元年11月15日）

幕府・薩摩を支えた琉球の主体性
―薩摩・琉球・中国―

講師　安藤　奈々さん（学習院大学大学院史学専攻）

近世期の琉球

近年の琉球史研究は、慶長14年(1609)の島津侵入から明治12年(1879)の明治政府による琉球国の解体(琉球処分)までを近世琉球と時代区分しています。

琉球国は中国(明・清)が構築した国際秩序＝冊封(さくほう)体制によって認定された王を頂点とする国家体制であり、近代的な「国家」の概念と少し異なります。

明初期において琉球は中国側の強い働きかけに応じて冊封・朝貢(ちょうこう)体制に平和裏に参入していました。中国皇帝から琉球山王号を叙任され、明・清両朝を通じて冊封使節団が派遣されていました。朝貢品(馬、硫黄、銀など)に対しては、皇帝から常に下賜品(王装束や反物など)がありました。朝貢貿易では原則的に免税措置もあり、琉球側は積極的に朝貢貿易活動を展開、薩摩藩による支配以後においても、中華帝国の中の一朝貢国として存在していました。

日本との関係については、薩摩藩の軍事的征服をきっかけとして幕藩制国家に組み入れられ、琉球国王の代替わりや王府高官らの任免に関して薩摩藩の介入により王権も制限されました。

薩摩藩は、琉球国全体をけん制・監視する一方、海防監視や対中国貿易の実務的な役割を担う存在として、琉球に在番奉行を派遣し常駐させていました。しかし、あくまで中国との冊封・朝貢関係を有する琉球王権の存在を前提とした支配方針でした。年貢納入や、幕藩制国家の支配原理であるキリシタン禁令も琉球国の隅々まで及んでいました。一方、琉球国を幕藩制国家の保護下にある存在とみなしていたので、幕府はオランダ船の琉球国への海賊行為を禁止する法令まで発していました。

このように琉球は、相対的に考えると規制力の弱い中国との朝貢関係を保持する一方で、従属度の強い薩摩藩・幕府の支配領域にも含まれつつ、双方とのバランスをとっていたのです。

江戸への使節派遣・江戸のぼりの装束

琉球使節の江戸派遣は基本的に薩摩藩から琉球側にさまざまな指示がなされていましたが、旧来の通説である異国風の「強制」というよりは使節全体の見栄えの問題として、海陸の旅立ちの道具は異朝の風物に似るようにして、全体的に唐風にと指示しています。もともと琉球では高位の身分の者ほど唐装束を着用しており、天保3年(1832)の江戸のぼりの装束を日程・行事ごとに検討した結果、琉球の唐装束の風習を核として、諸道具などを含めて一層の唐風を「強調」したものと考えられます。琉球使節の派遣は、薩摩藩の強い働きかけによって幕末まで継続されます。

薩摩藩にとって琉球使節の参府は島津氏の官位昇進と結びつけられ、他方、幕府は一貫して琉球使節を「来貢」と位置付け、異国琉球を従える幕府権力の「御威光」を民衆に見せる装置的役割をも果たしていました。

独自の琉球文化の形成

現在に続く琉球文化は古琉球から連続する染め織り、漆などがありますが、それらを含め近世に至って大成されたものが大半です。そのきっかけとして考えられるのが王国の存在と、中国・日本とのつながりです。

和歌の影響を受けた琉歌は八・八・八・六の三十文字で歌われ、士族から庶民まで広く親しまれていました。また音楽・芸能では三線(さんしん)が代表的で、古琉球期に中国から伝来し、琉歌の伴奏楽器として近世には中心楽器となりました。

琉球の文化は、17世紀後半から18世紀前半に大きく発展しました。中国冊封体制下の朝貢国としての立場を維持しつつ、幕府・薩摩に対しては期待通りの「異国」を演じ、芸能・音楽など中国直伝の文化を前面に出しつつ、しかし日本的教養も必要でした。琉球文化として、琉球舞踊・三線・組踊を披露する一方、士族たちは和歌・漢詩をこなし、また琉歌に親しんだのです。薩摩や幕府と中国、双方の間にあった琉球は文化的主体性を維持できるよう必死に文化を創り出し発展させていったのです。

おわりに

近世期の琉球は日本(幕府・薩摩藩)と中国の間にありながらどちらに吸収されるわけでもなく、ある意味、特殊な地位を維持し続けました。琉球をめぐる幕府・薩摩藩と中国の支配秩序の中で、どちらにもかたより続けることなく、両方への仲介や「望み」を調整しつつ、琉球王国として主体性と安定を図っていったことにより、琉球独自の文化や意識を花開かせていったのです。

レポーターからひとこと

友の会の古文書講座でおなじみの安藤奈々講師ですが、今回、友の会セミナーには初めてのご登場です。講義の冒頭、昨年10月31日未明に火災で焼失した首里城について、明け方のテレビで見た時のショックを、熊本県民が愛する熊本城を地震で失った悲しみになぞらえ話されていたのが印象的でした。　参加者172人。

【記録】文・写真：広報部会・岡本　脩

えど東京一景

(20) ―柴又帝釈天―

東京のはずれJR常磐線金町駅を降りて駅が三つ(金町・柴又・高砂)しかない京成金町線に乗り換えて、たった一つの途中駅、柴又駅に降りてみました。駅前では、有名な映画「男はつらいよ」シリーズの寅次郎と妹のさくらの銅像が出迎えてくれます。寅さん記念館、山田洋次ミュージアム、山本亭、矢切の渡しなど、のんびりした散策には最適な町です。草団子屋も並ぶ帝釈天参道を歩くと間もなく柴又帝釈天の二天門。入ると正面に立派な瑞龍の松の枝ぶりの後ろに帝釈堂拝殿が見えます。

柴又帝釈天は経栄山題経寺という日蓮宗のお寺です。350年ほど前、寛永の昔、題教院日栄上人が松の根方に霊泉の湧くのを見て、ここに庵を造ったといわれます。今も湧き続ける御神水と瑞龍の松が迎えてくれます。日蓮聖人が彫ったといわれる帝釈天の本尊がありましたが所在不明になっていたところ、240年前、本堂を修理の際、棟の上より1枚の帝釈天の板本尊を発見。ちょうど安永8年(1779)の春、庚申(かのえさる)の日だったため、9代日敬(にちきょう)上人は「庚申(こうしん)」を寺の縁日としました。上人自らこの板本尊を背負って出開帳し、折しも天明の飢饉、疫病に遭った江戸の人々に拝ませて不思議なご利益を授けたといいます。これにより帝釈天信仰が高まり、殊に江戸時代末期に盛んになっていた「庚申待ち」の信仰と結びついて、「宵庚申」の参詣が盛んになりました。見渡す限りの葛西田圃に提灯の列が続き、大変な賑わいだったそうです。市中からおよそ3里(12km)の道程を宵にかけて参詣する風俗は受け継がれ、現在でも庚申日には多くの参詣者が訪れ、夜も賑わっています。帝釈堂の内殿は大正、拝殿は昭和の初めに造営され、内外には数多くの木彫が施されています。特に内陣外壁をめぐる10枚の胴羽目彫刻は法華経の説話が彫刻されたもので、間近に鑑賞することができます。

【取材】文：広報部会・佐藤美代子／イラスト：同・福島信一

江戸博クリップ

屋上庭園!?

管理課管理係長　門馬 尚高（もんま なおたか）

明けましておめでとうございます。

私が都庁で江戸博を所管する生活文化局の職員となった平成3年、館はまだ建築中でした。予算担当として何度か視察に呼ばれ、工事用エレベーターで屋上に上がらせてもらったりしたことを覚えています。けれども当時は、将来、そこで働くことになるとは知る由もなく……。

その頃から二十数年。何年後かには博物館は大規模な改修工事が必要となる程の年数が経ってしまいましたので、この間、私自身にも随分と変化がありました。

まず、一日二箱吸っていた喫煙と、毎週土日はずっと競馬という生活を改めました。そして、ガーデニングを始めました。

いつの頃からか、種苗会社のカタログを熟読するようになり、植物を色々と育て始めました。大切に育てれば一年草も冬越しできることを知り、ミニトマトは三年目の夏も実をたくさん付けています。花の名前も覚え、植物園へも行くようになり、例えば、芭蕉という植物を知ると、なぜ松尾芭蕉は芭蕉をその名としたのだろう、だってバナナにそっくりで全然似合わないのになどと、興味の範囲も広がっていきます。季節も意識するようになり、歳時記を色々と買い込んでパラパラ眺めるようにもなりました。

今の江戸博は桜がきれいですが、やがて行われる大規模改修の時には、素敵な屋上庭園なんかもできればいいなと想っています。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㊼

[清水坂から西台山円福寺]

薬師の泉庭園

今回は板橋区の志村から西台へと歩きます。途中には中山道の史跡も残されています。歩いたのは遅めの残暑となった９月下旬から10月上旬でした。

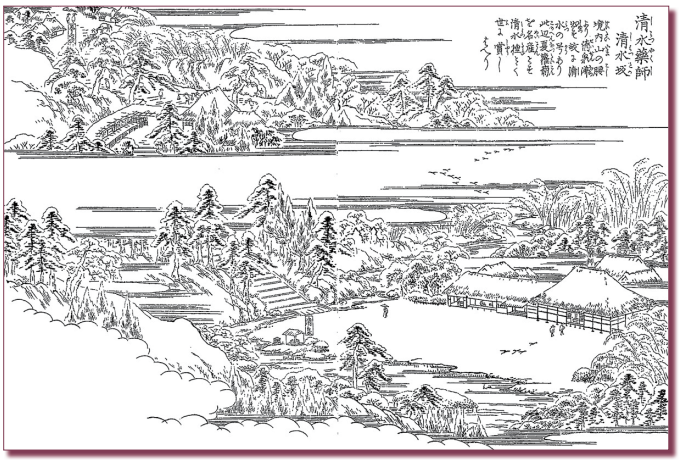
清水坂から清水薬師如来

都営地下鉄三田線志村坂上駅下車。Ａ１出口から地上に出ると、中山道を挟んで一対の志村一里塚があります。日本橋から３里目に当たる塚で、都内に現存する一里塚２カ所のうちの一つです。塚の大きさは５間(約９m)四方、高さは１丈(約３m)あり、想像していたより大きなものでした。塚上に植えられている榎は現在３代目となっています。また、東の塚の隣に立つ昭和８年(1933)築の齋藤商店は板橋区を代表する近代和風建築で、志村一里塚と一体化した景色はまるで美しい風景画のようでした。

西の塚から北に進んで、坂上交番の三叉路を左に入る道が旧中山道です。道の途中には富士・大山道との分岐点があり、寛政４年(1792)建立の大山道道標と万延元年(1860)建立の庚申塔が立っています。ここから先は清水坂の下りとなります。曲がりくねった急坂で、中山道最初の難所といわれていました。かつては志村城主千葉隠岐守信胤(おきのかみのぶたね)が改修したことから隠岐殿坂、あるいは坂の途中に石地蔵があったことから地蔵坂と呼ばれていました。その後徳川吉宗が坂下にあった大善寺の薬師如来を清泉に因んで「清水薬師」と名付けたことから、清水坂と呼ばれるようになりました。また、富士山が右側に見える場所があり、「右富士」の名所としても知られていました。

坂の途中を右に折れて中山道を渡ると薬師の泉庭園があります。ここが大善寺の跡地で、板橋区が図会の挿絵を元に清泉(薬師の泉)のあった庭を整備復元して、平成元年に開園しました。さほど広くはありませんが、薬師池を中心に小川・滝・あずまやなどが配され、気持ちよく散策が楽しめます。挿絵と照らし合わせて園内を眺めると、当時の景観が目に浮かぶようです。

隣接する総泉寺は浅草の橋場にあった寺で、巻之六に記載があります。昭和３年に当地へ移転して大善寺を併合しました。山門前には寛保４年(1744)銘のある「聖徳太子彫刻清水薬師如来」の石碑が立てられています。本堂の右手には、大善寺の本尊であった清水薬師如来を祀る薬師堂と、地蔵坂の名の元になった地蔵を祀る地蔵堂がありますが、どちらも中を見ることはできません。寺務所の方に伺うと、ご開帳はしていないとのことでした。



▲長谷川雪旦：清水薬師　清水坂

熊野権現の宮から千葉家の城址

再び中山道を渡って清水坂に戻ります。坂下付近から右へ折れる道の先には、板橋宿と蕨(わらび)宿の中間として志村合(あい)の宿が設けられていました。現在その方向に目をやると、地上に出た三田線のガードが道の上を横切っています。

清水坂から道なりに進み上り坂から高台の道を行くと、右手に熊野権現の宮(現志村熊野神社)の鳥居が見えてきます。この辺り一帯は千葉家の城址(しろあと)(志村城跡)で、鳥居をくぐるとすぐ左手に「志村城跡」の石柱が立っています。志村城は豊島氏一族の志村氏により築かれた城で、康正２年(1456)に千葉信胤が赤塚城の出城としました。千葉氏の鎮守となった熊野神社の場所は二ノ丸に当たります。社殿は昭和32年の再建ですが、周囲には樹木が生い茂り荘厳な感じです。社殿右手の入母屋造りの絵馬堂は江戸時代の拝殿を移築したもので、多数の絵馬や扁額が掲げられています。また、社殿の西側には本丸と二の丸の間にあった空濠の跡が残されており、往時の姿が想像されます。鳥居の左手にある志村小学校の辺りがかつての本丸でした。

西台山円福寺

志村城の南から西にかけては中台(なかのだい)・西台(にしのだい)と呼ばれる高台がありました。今日でも中台(なかだい)・西台(にしだい)という町名として使われています。志村小学校前の坂を下って首都高速５号線下を渡ると中台で、さらに西へ進んで環八通りを渡ると西台です。通りを南下していくと右手に西台公園があります。公園全体が斜面状になっており、奥から見下ろすと丘と窪地の地形がよく分かります。

公園前を進んで西台中央通りを渡ると、正面が西台(さいだい)山円福寺です。太田道灌が文明11年(1479)川越に開創、慶長13年(1608)に当地へ移転しました。山門から参道を進むと、本堂前には高野山から移植したと伝わるコウヤマキの大木がそびえています。樹齢は約400年で、板橋区の天然記念物になっています。明治時代再建の本堂は修復工事中でしたが、左手前の檻にいる２羽のクジャクが目を引きました。寺宝として道灌が茶室で使用していたと伝わる明徳２年(1391)銘の雲版(うんばん)と文明17年銘の月待画像板碑がありますが、残念ながら一般公開されていません。寺前から西台交差点に出てしばらく直進すると、都営三田線西台駅に出ます。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

古文書講座

◆第３期の日程

１月から今年度最終の第３期が開講します。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内いたします。

◆入門編　講師：田中　潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：１／８(水)、２／５(水)、３／４(水)

◆初級編　講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：１／15(水)、２／19(水)、３／18(水)

◆中級編　講師：吉成香澄さん(徳川林政史研究所非常勤研究員)
- 開催日：１／18(土)、２／22(土)、３／21(土)

- 時間：各講座とも午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸東京博物館１階会議室
- 参加費：各講座とも全３回2,000円(初回一括払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展「江戸ものづくり列伝ーニッポンの美は職人の技と心に宿るー」

◆本展では、人びとに潤いと彩りを与え、四季折々の生活シーンに応じて配される建具や調度品などを展示して、豊かな遊び心と繊細な美意識により日本の美を作り上げてきた‘ものづくり’に生きた職人たちを取り上げます。また、明治前期に日本を訪れたヨーロッパ貴族バルディ伯爵の日本コレクション(ベニス東洋美術館所蔵)の日本での初公開をはじめ、当館のコレクションを中心に、江戸東京で活躍した職人たちの仕事と人生に光を当て、日本が世界に誇るものづくりの力の源泉を見つめていきます。本展企画担当の落合則子学芸員から「見どころ解説」を聞き、会員だけの観覧会をゆっくりと心ゆくまでお楽しみください。

- 開催日：２月14日(金)
- 受付開始：16時30分
  17時～17時30分　見どころ解説　１階小ホール
  17時30分～19時　自由観覧　１階特別展示室
- 申込締切：１月30日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館　１階小ホール／１階特別展示室
- 定員：130人　同伴者可(はがきに氏名連記)

＜申込みは先着順で受付けます＞

- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】阪上克弘(事業部会)

友の会セミナー

第186回「公家女性の装束と着装について」

講師　田中　潤さん(学習院大学非常勤講師)

◆今回は「十二単(じゅうにひとえ)」と通称される、公家女性の装束について、その歴史的な変遷と現在に伝わる着装について紹介します。令和の時代になり、昨秋には天皇陛下の御即位に伴う諸行事において、公家・女房装束が多数用いられました。普段見慣れない「伝統的な」装束の数々をご覧になる機会がとても多い１年であったかと思います。公家女性の正装とされた「五衣・唐衣・裳(いつつぎぬ・からぎぬ・も)」を中心として、その構成や、生地に用いられる有職織物、そこに表現された「かさねの色目」や「有職文様」など、令和の時代に伝えられた有職故実の世界をご案内します。

◆講師略歴：たなか・じゅん
昭和53年(1978)生。学習院大学大学院博士後期課程修了。博士(史学)。専門は有職故実(服飾)を中心とした日本近世近代文化史。現在学習院大学・お茶の水女子大学・杉野服飾大学非常勤講師。

- 開催日時：１月19日(日)　14時～15時30分
- 申込締切：１月９日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】川上由美子・待場浩(事業部会)

第187回「杉浦日向子の視点～江戸へようこそ～」

講師　野呂達矢さん(江東区芭蕉記念館次長)

◆NHK「コメディーお江戸でござる」でお馴染みの杉浦日向子さんの言葉に「あれ、私が住むべき本当の町は江戸だったんじゃないかと思うことがありますよね」というものがあります。そんな杉浦日向子さんは「江戸からの旅人・タイムトラベラー」などと評されていました。彼女は平成17年に亡くなりましたが、ご存命であれば還暦を迎えていました。深川江戸資料館で杉浦日向子企画展をされた先生に彼女の多様な仕事や魅力などを、様々な角度から紹介していただきます。(このセミナーは令和元年10月12日台風のため、延期になったものです。改めてお申し込み下さい)

◆講師略歴：のろ・たつや
(『えど友』111号11頁参照)

- 開催日時：２月１日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：１月16日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階小ホール
- 定員：130人　同伴者可(はがきに氏名連記)

＜申込みは先着順で受付けます＞

- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】中村明義(事業部会)

第188回「大名に嫁いだ将軍姫君の生活」

講師　吉成香澄さん(徳川林政史研究所非常勤研究員)

◆将軍の姫君は大名と結婚したのち、御守殿や御住居とよばれる御殿で生活しました。しかし、姫君を迎えた藩は、その生活費など財政面での負担が大きくのしかかり、たびたび幕府に補助金を要請しました。このようなことから、御守殿は華やかで贅沢な暮らしをしていたとイメージされがちですが、実際はどうだったのでしょう。御守殿で役人や女中として勤めた人々の日記などを用いて、その様子を探っていきたいと思います。

◆講師略歴：よしなり・かすみ
昭和55年(1980)生。学習院大学大学院史学専攻。徳川将軍姫君の結婚や大奥などを研究。

- 開催日時：２月15日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：１月30日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階小ホール
- 定員：130人　同伴者可(はがきに氏名連記)

＜申込みは先着順で受付けます＞

- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】阪上克弘・川上由美子(事業部会)

見学会

バスで巡る品川宿・日本橋・千住宿

◆友の会では平成16～26年に品川宿、板橋宿、千住宿、内藤新宿の江戸四宿を巡る見学会が数回に分けて開催されました。元号も変わり令和に入っての今回の見学会は、過去の見学会のダイジェスト版として、道路事情の良い休日にバスで品川宿・日本橋・千住宿を１日で訪れます。午前中は青物横丁から北品川までの旧東海道品川宿内の主要な所を散策し、バスで移動後日本橋川沿いの食事処で昼食。食後に旧常盤橋まで散策します。午後は矢立初めの芭蕉像から千住５丁目まで旧日光街道千住宿内の主要な所を散策、旧街道の面影が残る二宿と日本橋を訪ねるバスツアーです。

- 開催日：３月15日(日)(雨天決行)
- 受付開始：８時　受付終了：８時30分(時間厳守)
- 集合場所：江戸東京博物館北側入口レストラン三笠前
- 申込締切：２月17日(月)必着
- 定員：100人　同伴者可(保険の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号連記)

＜申込みは先着順で受付けます＞

- 参加費：(昼食代込み)：会員5,500円・同伴者6,000円
  参加費は前納で、見学会受講票受領後３月２日(月)までに友の会事務局に振り込みください。

【企画担当責任者】待場浩・川上由美子(事業部会)

地域文化探訪・学習会

第17回 (2019年度 第２回)

「大田区立郷土博物館」を訪ねる

◆大田区を中心とした人文科学系博物館で考古、歴史、民俗資料の保管・展示をしている博物館です。地域的にも縄文・弥生の考古資料展示が中心ですが、近世関連では六郷用水や大森麦わら細工が皆さんの興味を引くところではないでしょうか。当日は、館の紹介、常設展示の見学、展示品の専門家による説明・解説をお願いしています。

- 開催日：２月26日(水)13時30分～14時　受付
- 開催場所：大田区立郷土博物館(大田区南馬込五丁目11番13号)
- 学習：14時～15時30分　(自由解散)
- 交通：都営地下鉄浅草線「西馬込」駅東口から徒歩約7分
  ＊詳細は受講票でご紹介します。
- 申込締切：２月10日(月)必着
- 定員：30人**(会員のみ)　定員を超えた場合は抽選**
- 参加費：500円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

会員優待のお知らせ

会期残り僅か お見逃しなく！

●特別展「大浮世絵展－歌麿、写楽、北斎、広重、国芳　夢の競演」

会　期：11月19日(火)～１月19日(日)
会　員：一般700円、65歳以上350円、大・専門生560円
同伴者：一般1,120円、65歳以上560円、大・専門生890円
＊中学生(都外)・高校生は65歳以上と同じ。
中学生(都内)・小学生以下は無料。
●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

次回予告

●特別展「江戸ものづくり列伝－ニッポンの美は職人の技と心に宿る－」

会　期：２月８日(土)～４月５日(日)
会　員：一般550円、65歳以上275円、大・専門生440円
同伴者：一般880円、65歳以上440円、大・専門生700円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

企画展のご案内

●天下泰平 ～将軍と新しい文化の創造～

会　期：１月２日(木)～２月16日(日)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

次回予告

●市民からのおくりもの2019

会　期：３月10日(火)～５月６日(水・休)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日：１月：１日(水)、６日(月)、27日(月)
２月：３日(月)、10日(月)、17日(月)、25日(火)

催事のお申込方法

◆**普通はがき(63円)**に、①催事名(略名可)・開催日
②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。

会報＜えど友＞第113号
令和２年１月１日発行(奇数月１日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：林　正信(会長)　編集長：中村貞子
岡本 脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、横島利明、福田 徹
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910